三宅島新報

発行所：三宅島ふるさと再生ネットワーク
〒100-1101
東京都三宅島三宅村神着 320-2
TEL 090-4922-0798
発行人：会長 佐藤就之

再生ネット協力者会議３月に開催

非帰島島民のケア 最重点に

訪問活動・指圧の集いで支援強化へ

３月26日に、東京国際ユースホステル会議室で「三宅島ふるさと再生ネットワーク・第２回協力者会議」が行われ、非帰島島民を含む23名が参加した。

会議では、２００６年度計画案や予算案、役員案などが発表されたほか、非帰島島民への情報提供や交流会の実施、生活再建支援を拡大する方針が打ち出された。

新年度の活動の最重点には、島の情報提供や健康状態の確認を目的とした「ふれあい訪問活動」を置き、都内各地に住む島民への心のケアを進めていくことが決定した。また、北区の桐ケ丘団地で行われている「指圧の集い」も力を入れていく予定だ。

また、「三宅島新報」や「三宅島ふるさとだより」の発行にも力を入れ、ホームページとの連携を図りながら、情報の提供も積極的に行う。

参加した非帰島島民からは、生活保護の見直しや三宅島の村営住宅を拡大してほしいなどの活発な意見が出された。

その後、協力者の紹介や懇談が行われ、再生ネットの活動が一歩前進する体制が整えられた。

非帰島島民の方からも積極的な発言が

活発に意見が交わされた協力者会議

事務局便り

○５月13日（土）の午後１時、阿古小学校で火山市民ネット第４回フォーラム三宅島大会を開催します。

○５月16日（火）にネット世話人会議を開催します。詳細は追ってご連絡致します。

○ご寄付のお願い！新口座を開設しました。手数料は当方で負担します。

郵便振替口座
口座番号：00120- 3-545036
口座名称：三宅島ふるさと再生ネットワーク

事務局：あすなろ保育園内
電話・ＦＡＸ　03(3963)5697
担当　大坊・伊藤

再生ネット　協力者の言葉

吉田　信之さん
１２０世帯を目標に訪問活動

佐藤会長の行っている活動に共感し、再生ネットのお手伝いをさせていただくようになりました。主に訪問活動に関わっています。在京の方々に関する情報が少ないのが現在の問題点ですが、今後は訪問活動を組織化し、公営住宅に入居している１２０世帯をすべて訪ねることが目標です。

山下　文子さん
指圧の集いで島民に癒しを

非帰島島民の方々の心と体の解放を目的に、「指圧の集い」を北区桐ケ丘団地で開催しています。

新潟の被災地や世界各国の災害地でも活用されている施術を生かしたいと思います。今後は集いの回数を増やし、料理などを持ち寄って交流できる場にしていきたいと考えています。

再生ネットの活動

課題解決に向け前進

3月26日、東京国際ユースホステルで協力者会議を行った「三宅島ふるさと再生ネットワーク」。「復興に向けてさらなる課題が見えてきた」と述べた会長の佐藤就之さんに、島の現状や今後の活動について伺った。

協力者会議で活動方針などを話す佐藤会長

マスコミが発信 被災地三宅島の実態

非帰島島民支援については1面で紹介したように、第2回協力者会議で基本的な方向を定めることができた。

当会の目的の一つである被災地三宅島の実態を全国に発信する活動として、各メディアが帰島1周年を特集した際に積極的に協力。非帰島島民の問題を含め、好意的に取り上げられたことから、再生ネットの役割も充分果たすことができたと自負をしている。

特に、NHKテレビは当会の活動を放映。全国に支援の輪が広がった。また同ラジオでは「ゆく年くる年」の正月番組で、私の自宅から全国に生放送された。

他にもTOKYOFM、TBSラジオでも放送された。（当HPで紹介中）。

毎日新聞が代弁 非帰島島民の気持ち

新聞では全紙で取り上げられたが、2月8日の毎日新聞に掲載された「記者の目」特集では、「5年半前、一緒に島を離れ避難生活の苦労を共にした島民同士だ。帰れない島民を置き去りにしない形で復興を、村はぜひ模索してほしい」（大槻英二記者）とある。

非帰島島民の切ない気持ちを代弁し、また今回の避難と帰島方法の核心を指摘している。

さらなる復興に向けて 行動開始の呼びかけを

帰島から1年。長期避難期間の是非や帰島方法の問題点も見えてきた。今後残された課題は復興であるが、家屋の修繕や畑の作付けの段取りもつき始めたため、当再生ネットはさらなる復興に向けての検討、行動開始を呼びかける努力をしていきたい。

2006年度役員

会長：佐藤就之（島民・神着）
副会長：酒井一豊（未帰島・練馬）
事務局長：大坊千代子（島外・板橋）
監事：稲葉稔（島民・神着）
横井和之（島外・埼玉）

御寄付者名

（2月3日～4月17日・○数字は寄付の回数）

【三宅島出身者】大石真様③，窪田季治様，片瀬功様②，栗本雄介様②（御蔵島），千葉允子様，森浅香様，浅沼英彦様，【島民】本谷善明様，稲葉稔様，川口憲様，佐久間寛次様，前田玄様，光安千久子様②，【島外】高橋昌生様，江利川夏枝様②，横井和之様②，山下文子様，吉野文雄様②（株）キタジマ様，小池上照子様②，有）豊田水産冷蔵様，髙橋栄一様③自治労八王子職員組合様，鈴木節子様②，井上教子様②，﨑山敏也様，金澤利夫様，南海タイムス社様，中村ルイ子様，田中良雄様，土岐富士子様，長谷川正晴様，山崎太郎様②，【在京者】田中三枝子様，玉城長之助様，平松尚志様②，村上孝夫様，山本敏子様，宮澤良様，福澤晴行様，小池幸七様

TOPICS

【お便り】

在京三宅島会の活動をNHKテレビ番組で見た群馬県の橋本三郎様から貴重なお米をご寄付頂いた。訪問活動の折にそれをお渡しした北区のFさんのお便りを紹介する。

「先日は心暖かいお米が届き有難う御座いました。三宅島に帰島出来るまでどうぞ皆さまのお力を宜しくお願い致します。まずはお礼まで失礼致します。」

【雑誌の贈呈紹介】

潮十二月号「帰島」の二四〇日ドキュメント三宅島　栗原仁雄著

世界4月号「ルポ」帰島から一年復興に向け試される三宅島　沢見涼子著

【電話帳第二版】

電話帳第二版配布、掲載ご希望の方は、折込用紙にご記入の上で事務局に返送してください。FAX、電話でも受け付けます。

東京大学大学院教授　廣井脩氏ご逝去

復興への鋭い指摘残して

防災問題の第一人者である東京大学大学院教授の廣井脩氏が４月15日、59歳の若さでお亡くなりになった。当編集部では、三宅島噴火当初から被災者の立場から全力で救済策を訴えて、三宅島島民連絡会の協力委員やフォーラムに参加して貴重な発言を頂いた経過もあり、取材を申し込んでいた矢先の出来事であった。今回先生の追悼の意を込めて第１回、第３回の火山ネットフォーラムでの鋭い指摘を取り上げた。なお葬儀には大坊事務局長が参列し弔電をお送りした。ご冥福を心よりお祈りいたします。

「噴火災害復興における住民活動のあり方に関する第１回フォーラム有珠山大会」のコーディネーターを務める廣井先生（左端）

略歴（ひろい　おさむ）
1975年東京大学新聞研究所助手。1980年同助教授。1992年東京大学社会情報研究所教授。1999年から東京大学社会情報研究所長、東京工業大学情報理工学研究科併任教授（1997～1999年まで）。日本災害情報学会会長・日本社会情報学会理事・日本自然災害学会理事・地域安全学会理事。
2006年４月15日、ご逝去された。

02年　第1回フォーラムより
「厳しい生活保護の条件」

「衆議院と参議院の災害対策委員会では、三宅島の支援について、生活支援の決議が入っていますが、全然実現できていません。

そんなわけで、たぶん従来型の生活支援事業は難しいのではなかろうかと思います。そうなりますと、また生活保護ということになります。古いことですが、三宅について、２００１年２月に、東京都と会合をもちましたところ、その時点から、東京都の基本的なスタンスは、避難した方々への対策を災害対策ではなくて、社会福祉対策として考えていたそうです。要するに、そんなに困っているなら、生活保護をうければいいじゃないかという発想です。ところが、生活保護というのはなかなか制約が多い。貯金をはたかなくてはいけない。生活再建支援金と義援金は収入として認めますから、二十数万円は貯金してもいいけども、それ以外はいけません。それから、生命保険も解約しなければいけないというような、厳しい条件がついております。自宅以外の住宅も駄目です。そうなりますと、一度生活保護を受ければ、島に帰った後も生活保護ということになる。それはおかしい。つまり、一時的に災害の為に収入が少ない、災害が終わればまた元の生活に戻れると、そういう人に対しては制約条件を緩和して、余裕を持って帰島してもらうことが必要」と話された。

04年　第3回フォーラムより
「災害は終わっていない」

県知事らの住宅支援の取り組みを挙げて、「国のレベルではなくて、自治体のレベルでどんどんそういう住宅再建の問題が具体化してくるという意味では、一種のお土産というかお見舞いというか、帰島の際にやはり東京都知事が、時期は災害直後ではありませんけれども、いろいろな総合的な判断を下して何らかの現金支給をするということができればありがたいな、ぜひそうしてほしいものだなと思っています」と強い要望を訴えた。

また、「こういう人たちもやはりまだ災害が続いているわけですから、たとえば都営住宅は有料になるよということでは困るわけです。ですから、２月に一応いったんは帰るけれども、災害は終わっていないよということが基本的な認識です。そして、火山ガスの危険地域は避難勧告地域として残しておいて、センサー等々の安全対策を取る」ことが必要なのだと話された。

「まだ終わっていないのだという認識は、これは三宅の人たちだけではなくて全国にもまだアピールする必要はある」と語られた。復興については基金が大事だが、三宅島の場合はもう間に合わないとも話す。「とにかくいろいろなコネを頼って働き掛けて、とにかく島に帰った少なくとも数年ぐらいの間は、本当に困ったときに公的なお金でない形のお金を調達できるストックを蓄えておく必要がある。義援金を再び募集してもどれだけ来るかというのはちょっと現実味がないので、宝くじなんかをどんどんやるべきだと思います」と話された。

目標は120世帯
訪問活動の範囲拡大

「三宅島ふるさと再生ネットワーク」による非帰島島民宅の訪問活動は、来月で1年を迎える。希望者に配布している電話帳は2版が完成。今年はさらに訪問の範囲を広げる計画が立てられている。

ふるさと再生ネットによる訪問活動（八王子）

「三宅島ふるさと再生ネットワーク」では、昨年6月から行ってきた非帰島島民への訪問活動の範囲をさらに広げて行くという方針を、3月に行われた第2回協力者会議で発表した。

具体的には、訪問地区を三多摩、練馬、東京北部の三つとして、地区ごとに代表者を置くという計画だ。このような取り組みにより、今年は公営住宅に入居しているすべての約120世帯を訪問するという目標を掲げている。

同ネットでは2005年6月から06年3月までに、北区桐ヶ丘団地などの約20世帯に150回ほどの訪問活動を行ってきた。訪問の際には、近況を伺うとともに、三宅島に関する資料の配布などをしている。

また、島民の懇談会や新年会などのお知らせもしているほか、希望を確認し、訪問活動の中などで得た情報をもとに作成した非帰島島民電話帳も配布している。

訪問活動を担当する伊藤奈穂子さんは、「一人ひとりに事情があるので、それぞれの人に合った訪問をすることが今後の課題です」と話した。

訪問員紹介

伊藤奈穂子さん

伊藤奈穂子さんは保育士で人形作りが得意。島民ふれあい集会にも参加していた。帰島できなかった人に島の情報を伝え、悩みを抱えている人に協力したいそうだ。

大橋裕美さん

大橋裕美さんは、大学で修士論文を作成中。人と話すことが好きで、訪問活動を通じて帰島できなかった人から三宅島の話をたくさん聞いて、勉強したいという。

非帰島島民　寺澤夏雄さん（神着）
揺れる心「帰れるなら帰りたい」

避難当初は「1年で帰れる」と思っていましたが、稲城に4年間、そして避難期間が終了した昨年8月からは八王子で生活をしています。

避難指示が解除されたときに、心臓病などにより帰れないことを村の職員に相談すると、「残る人はすべて個人でやってください」と言われ、自分の力で暮らしていく決心をしました。始めは電車の切符を買う方法も知りませんでしたが、今ではバスで様々な所に行くのが楽しみになっています。

現在は定期的に島へ帰り、家の修復を行っています。これは、あとで息子たちが戻って来られるようにするためです。村は帰るたびに状況が悪化しています。しかし、ガスの影響がなくなったら自分たちも帰島したいという思いもあり、こちらに残る決心をしたとはいえ、まだ心が揺れています。

編集後記

今回もお手伝いさせていただきました「DTPA」です。私たちは4月に、取材を兼ねて訪問活動をしました。ニュースだけではわからない非帰島島民のみなさんの思いや厳しい現状を知ることができました。これからもより多くの情報を伝えていきたいと思います。（DTPA一同）

この新聞は大妻女子大学人間関係学部干川研究室が印刷に協力しています。